

特 100

394

A Single Battle.

此一戰

北島春石



始





武俠叢書

第

一

編

此

一

戰

北島春石著

大正
3. 10. 9
內交



Faint, illegible text or markings on the right page of the notebook, possibly bleed-through from the reverse side.

序

嗚呼光榮ある日東の小國民よ！ 予は卿等に警告す。曩に清露兩國と戦ひ、一舉戰勝國の名譽を擔ひし我等の祖國は、今や墮弱なる文明の呪咀を受けて、日に月に奢侈放逸淫靡墮落の深淵に陥りつゝあり。今にして是を救はずんば、日東民族の精華を稱へつゝある大和魂は今にして是を救はずんば、日東民族の精華を稱へつゝある大和魂は何時の世にか再び發輝せん。眞に累卵の危機に瀕せるものと云ふべし。是等の悲むべき惡風潮を排し、虛榮と墮眠の裡にある日東民族を覺醒せしめ、有史以來二千五百歳、燦爛たる赫耀と溟澗たる活力を發輝し、眞に世界的日本國を建設せんを欲せば、戰勝國の虛榮に傲るを止めて、日常座臥、常に武俠的大精神を涵養せざるべからず。茲に

【序】……………一

【序】……………二

不肖亦鑑みる所あり、義憤の鐵筆を呵し、満身の努力を傾注し以て「此一戦」を著す。文元より愚劣論するに足らず、雖も、其の満腔の熱血を濺ぐや、百萬の大軍を携げて砲煙彈雨の戦場に馳驅する將軍の概無しさせざらんや。今や全世界戦雲暗澹たるの時敬愛なる日東の少國民諸君は、痛絶壯絶極まる本書に據つて、武俠的大精神を涵養せざるべからず！而して醒めよ、日本を墮弱せしめんと爲る歐洲文明の惡風潮より!!!

— 甲寅九月 —

春石識

此一戦目次

發端	戦雲漲る東歐の天地……………	一
第一彈	國交斷絶と露國大使の苦心……………	五
第二彈	忠僕黒奴は獨逸武官だ……………	一九
第三彈	獨逸軍艦英汽船を襲ふ……………	二〇
第四彈	甲板上の大血戦……………	三〇
第五彈	母子が失望は如何許ぞ……………	三九
第六彈	夜毎に見る怪しき父の夢……………	四六
第七彈	天運盡きしか遂に捕虜……………	五六
第八彈	祖國の敵を父の仇を……………	六一

目次

目次

第九彈 永久暗黒なる海底牢獄……………六九

第十彈 假裝黒奴に密書を奪はるゝや……………七五

第十一彈 眞に是れ生死の境……………八七

第十二彈 祖國の興廢 此一戦に在り……………一〇一

第十三彈 飛行船上親子の邂逅……………一一一

目次終

此一戦

北島春石著

發端 戰雲漲る東歐の天地

一握の爆裂彈は、常に暗雲低迷する巴爾幹半島問題を急轉直下せしめ、今や戰雲全歐の天地を裏んで、茲に世界未曾有の大渦亂を惹起した。

維時 西曆一九一四年六月、奧太利皇儲フェルザナント同妃殿下は、新府の地たるボスニア訪問の際、塞爾比生れの一學生の爲め、突如、爆裂彈を投ぜられ悲惨極まり最期を遂げられた。

この陰謀事件には、驚くべき怪事實が潜んでゐた。即ち塞政府の參畫加擔したと云ふ事である。

セルビアが奥太利に對して反感を抱くに至つたのは、久しき以前よりのものであるが、同人種のボスニア及びヘルエツェゴヴィナの二州民が、奥國領土に併合せられたる以來一層猛烈となり、先年巴爾幹戦争に於て、セルビア、モンテネグロ、ギリシャ、ブルガリア、トルコ、土耳古に對して連戦連勝し、これら諸國の領土を擴張せられ、更にセルビア、黒山國の聯合軍が勃牙利を敗るに及んで、セルビアは奥太利の干渉に憤激して益々憎むに至り、全セルブ運動は屢ば奥太利との關係を危殆ならしめた。これ即ち巴爾幹半島問題である。

然しながら、歐洲列強國が一致の行動を採る間、叢爾たる一小國セルビアの力を以て強大なる奥太利に敵する能はざるが故に、その皇儲暗殺に依つて怨みを酬むたが、これが爲め奥太利の激烈なる憤怒は今や高潮に達した。皇儲フエルザナント暗殺が導火線となつて、奥塞の國際は漸次切迫した。奥太利政府よりセルビア政府に發した最後通牒は頗る高壓的なるものであつ

た。奥政府はこの陰謀事件を動機とし、セルビア國を併呑せん企てたのだ。奥政府が斯くまでセルビアを威嚇したのは、其の同盟國たる獨逸の教唆する處ありしに依るや瞭明である。セルビア政府にして、彼の要求を容るれば、其の國土は奥太利の蹂躪するに任せればならぬのだ。

巴爾幹の日本を以て任せるセルビア民族は、何んとして奥政府の威嚇的要求に屈服しやうか。

尙武心に富む其の民族九百萬は、絶對的に奥太利の要求を排斥した。奥太利に獨逸、伊太利の同盟國あるが如く、セルビアにも又た佛蘭西、露西亞の後援が控へてゐるのだ。

セルビアは露佛の援助なくして、單獨に奥國と雌雄を決する勇氣ありや否やは頗る疑問なるのみか、若し兩國の現兵力より云へば、セルビアは一耐りもなく

敗者の地位に立つべきは數の免れざる所である。然るにも拘らず、尙武心強き塞爾比民族は奧太利と戦はんとした。

事態斯くなれば、露佛は奧太利の高壓的威嚇を座視傍觀するに忍びず、この小同盟國を援助すべく、奮然劍を撃ち起つた。

塞壤の國交斷絶と共に、獨逸は宣戰布告した。續いて、露西亞、佛蘭西も宣戰布告した。伊太利は最近奧國に嫌焉たるものあつて、愈々と云ふ際になつて局外中立を公表したが、その代理に土耳其は獨逸兩國に加擔した。

茲に於て英吉利も暴慢不遜なる獨逸を武力を以て懲すべく、敢然宣戰の布告をなした。

露西亞、塞爾比、佛蘭西、英吉利に對する獨逸、奧太利、土耳其の大陸戰將に歐州の山野を血河屍山の大修羅場に化し去らんとするに際し、北海、英、佛海峡、ビスケー灣及び地中海に於ける大艦隊の活躍は如何???さて、怖る

べき一握の爆裂彈よ!!!

第一彈 國交斷絶と露國大使の苦心

バルカン半島の戰雲濃かに、塞壤の國交斷絶するや、東歐の暴國獨逸は、英、佛、露に對して宣戰布告した。

斯くあるべしと豫期してゐた露國大使は、國交斷絶と共に、その駐在國たる獨逸旧林を引拂つて、本國露西亞へ歸還すべき準備に忙殺された。と同時に同大使より英京倫敦に向つて秘密電報が發せられた。

大使一行は、伯林よりウイスマー港まで出れば、其港には本邦汽船ニコライ號が投錨してゐるので、獨逸政府が承認のもとに、バルチック海を横斷して、ペトログラードへ無事引揚げる事が能きるが、今より三週間前、或る秘密命

令れいをふく含くませて、大使館附一等書記官ゴザルコフ氏ロンドンをはけし派遣はせしめてあるのだ。

大使はゴザルコフ書記官の復命に接せずば、露獨交戦上、非常な手違ひを生ずる怖れがあるので、成可くは同書記官の歸館を待ち、相俱に本邦へ引揚げたいのだが、今は既に退去時間が切迫してゐるから如何いかんも施すべき策がないので、已なく倫敦へ秘密電報を發したのである。

これを英京倫敦にて受取るべき筈なるゴザルコフ書記官は何うしたらう？彼の電報は受取人不明を以て返灰された。

大使の面上は見る間に愁雲に鎖されて「何、秘密電報が戻つたさ——うむ、これは容易ならぬ一大事ぢや！」と、重苦しい嘆息を洩らした。

併し、この場合、一刻も躊躇して居られぬ。大使は、激しく卓上の呼鈴を鳴らした。

それに應じ、直ちに扉を押して現れたのは若い黒奴である。彼はシイザボロー云つて、遂つひ半年ほど前より、この露國大使館に雇入れられた僕だ。

「お、シイザか。」と大使は顧みつゝ言つた。

「パンス書記官は居るか。」

黒奴は覺束ない露語で、

「はい、パンス様は御自分のお部屋でございます。手前、只今まで荷持へのお手傳ひして居りました。」

「急用がある！直ぐ此處へ來るやうに。」

「はい。」

「急ぎだ！直ぐに。」

さう命じて置いて、大使は椅子に躰を埋めたまゝ、額に兩手を蔽して深き瞑想に耽つた。

「黒奴は卓上に置れた秘密電報を屹見遣つた。その眼からは爛々たる怪光を放つたが、直ぐ元の愚直な顔付になつて、大使の事務室を出て行つた。」

「それと引替へに、二等書記官のパンスが入り來つた。」

「大使！御用でありますか。」

「お、パンス君。」

大使はパンス書記官を卓近く招き寄せた。

「一大事が出来たんぢや！今朝、倫敦のゴザルコフ書記官へ秘密電報を送つたところ、受取人不明でこれ此通り返戻された。」

「卓上の電報を指示めす。」

パンス書記官の面も、大使に劣らず蒼白めた。

「それは窮りましたな。すると、既にゴザルコフ君は倫敦を出發したものと想像されますな。」

「我輩もさう鑑定したんぢや。何分東歐の風雲急なので、ゴザルコフ書記官は倫敦に赴き使命を達するや、直ちに歸途に就いた事と思ふ——獨逸の宣戦布告前に伯林へ戻らうと思ふて。」

「無論、さうさ思はれます。然し、英佛兩國大使と共に、吾々は宣戦布告後二十四時間内に當地を退去すべき嚴命を受けて居ります。それまでにゴザルコフ君が歸館してくれれば好いですが……」

と言ひ渡して、パンス書記官は大使を見上げた。

大使の杞憂も其點にあるのである。

「さあ其點に就て君の意見を聞かうと云ふのぢや。」

「意見さば？」

「パンス君も知らるしが如く、ゴザルコフ書記官を倫敦に派遣したは英吉利政府と重大なる秘密打合せがある爲めぢや。で、其の結果の如何を聞かすば、駐

露大使の面目を失する。我輩一箇人としての耻辱は悔むに足らんが、本邦政府が獨逸に對する戰略上に大いなる錯誤を來す杞憂があるんぢや。さ云つて、ゴザルコフ書記官が二十四時間内に歸館すべしと思はれん。否、既に宣戰布告せられた今日であるから、倫敦よりの歸路で、獨逸官憲の爲め逮捕せられその復命書を奪取さるゝが如き場合あれば一大事ぢや。殊に獨逸政府の嚴命に依つて、吾々は宣戰布告後二十四時間内に此館を引揚げ、ウイスマー港より乗船せんぢやならん。然るに、ゴザルコフ書記官は、英國ドーバ港よりハンブルク港へ上陸し、同港より汽車の便を借り伯林へ到着すべき順序である。従つて吾々の引揚ぐべき方向とは反對ぢやで途上邂逅すべき望みはない。」

「さあ、其處です。」

パンス書記官は椅子を前めて、

「駐獨各國外交官中、敏腕を以て畏敬されつゝ在る我がゴザルコフ書記

官の事でありませうから、本邦と獨逸の國交斷絶を開けば、伯林へ戻るやうな輕舉はしますまい。僕の考ふるところに依れば、例令、今頃ドーバ港を出發したとするも、途上より方向を轉じて佛蘭西へ出るか、それとも諸威、瑞典を経由し、陸路ストックホルム港へ出て、同港より便船を待つて本邦へ歸りはせんか考へられます。」

大使の考慮もパンス書記官と同一であつた。駐獨各國外交官中、敏腕の名聞高きゴザルコフ書記官であるから、本邦の安危に關する秘密使命を受けてゐながら、戰塵濛々たる伯林へ戻るべき筈はないと思つて居る。併し、彼れが倫敦を發足し、ドーバ港より乗船後に宣戰布告されたとすれば、否應無しに其の上陸地たるハンブルクで、獨逸官憲に逮捕せられぬさは計られぬのだ。

それを大使は太くも憂ひてゐる。さ云つて、ゴザルコフ書記官に通信すべき

ほうはふ方法もなく、また自分等の一行も二十四時間内に獨逸國內を退去すべき嚴命に接してゐるので、悠々と其の歸館を待つ事は不可能である。

如何せんか、如何すべきか、二人は其の問題に腐心しても、唯嘆息より外に出づるさころは無かつた。

其時、扉の外に忍び寄る人の氣勢がした。

愕然として我に還つた大使は、

「誰ぢや？」と鋭く咎めた。

「——手前でございます。」

扉は開いて黒奴のシイザが入つて來た。

それを見たパンス書記は、逸早くも椅子を離れて、黒奴の腕を掴んだ。

「シイザ！ 其處で汝は何して居つたか。」

黒奴は更に驚き怖れし色もなく、

「手前は大使様にお願ひがあつて参りましたので………」
と沈着いて言ひ切つた。

第二彈 忠僕黒奴は獨逸武官だ

面憎くも沈着拂つた黒奴の態度に、パンス書記官は赫となつた。

「大使に用事があるなら、平素から呟附てある通り、何故扉をノックして其の許可を受けんのだ？ 汝は吾々の秘密を竊聽したのだらう。」

「はい、私は秘密の御相談を伺ひました。」と、愚直な黒奴は秘さんともせず白状した。

「何？ 秘密を聞いたぞ？」

パンス書記官の右手は洋服のポケットへ入り込んだ。其處には護身用として

常に短銃が藏されてあるのだ。

「黒奴もそれを知つてゐる、知つては居るが一向に驚く風もなく、

「その秘密の御相談を伺ひましたので、手前は大使様にお願ひがございます。」

大使は、さう言ふ黒奴を凝然と睨めてゐたが、何事が頷く處あつたらしく、

「パンス書記官、手荒な事をしてはならん。」と押しめて、

「こらシイザ！ 我輩に願ひとは何んぢや、言つて見い。」

黒奴は秘密を窺聽せし罪を打詫るが如く、大使の面前に叩頭したが、

「大使様の御本邦と獨逸とは愈々戦争が始まる事となりました。そして、皆様

は今日限り伯林をお引拂ひなさるに就て、手前にもお暇が出ましたので、丁抹

に居る友達を尋ねて參る心組であります、今まで御奉公を申上げながら、

何一つ忠義らしい事も致さず、此儘皆様とお別れ致すのが残念でなりません

取分け手前は書記官のゴザルコフ様には御最氣に預りましたので、お口を頂く

にしても、何か一つの功を樹てたいと平素から心掛けて居りました處、唯今、

何氣なしにお部屋の前を通りますと、大使様とパンス様のお話聲が聞えまし

た。それで、何か手前に御用でもと思ひ、扉の外から聞くこともなしに伺ひます

るさ、先日倫敦へお出でなされたゴザルコフ様の事で大相御心配の様子に見

受けましたから……」と此處まで渡みなく言つた黒奴は、不意に言葉を切つ

て大使を見上げた。其面には、ゴザルコフ書記官の安否を氣遣ふ色が現然と讀

まれた。

先にポケットへ入り込んだパンス書記官の右手は、元の儘で卓上に現れた。

「シイザ！ 貴様はゴザルコフ君の身を心配して居ると云ふのだな。」

黒奴は強く頷いた。

「ゴザルコフ様には大相御最氣になりました。彼の方にお間違ひがないやうに

と神に祈る手前の誠心は、大使様にも貴方にも劣らないほどであります。」

この時、大使は徐ろに口を切つた。

「シイザ！ 貴様には是非頼みたい事がある。貴様は我輩の依頼を聞いてくれるか。」

「手前で御役に立ちますれば……」

黒奴は立地に應じた。

「生命にかけてもお引受け致します。」

「可！」

大使はペンを執上げ、卓上に紙を展べたかと思ふと、早くも一通の書面を認め、それを封筒に収めて宛名の處に「ゴザルコフ書記官殿」と書入れたのを、黒奴の面前に突出した。

「最前の話に依るに、貴様は友を尋ねて丁抹へ赴くさうぢやな。この伯林より丁抹へ行くには、何れハンブツク港より汽船に乗込まねばならん。萬一、そ

の途中でゴザルコフ書記官に逢ふたら、この書面を手渡して貰ひ度い。但し、これは重大なる秘密書類であるから、獨逸官憲の爲めに奪取せられては大事故ぢや！ シイザ貴様はこの大役を引受けてくれるか。」

「はい必らず！ 神に誓ひまして。」

黒奴は恭しく彼の書面を受取つた。

「もし、途中でゴザルコフ書記官に邂逅せぬ場合は、直ちに火中してくれ。」
斯う言ひ添へた大使は、金庫を開いて一握の獨逸金貨を取出した。

「それ！ 旅費ぢや。」

黒奴は忙しく手を掉つた。

「左様なお手當は頂かずとも、手前は丁抹行の旅費を準備してあります。」

「まあ、取つておけ。」

「其代り仕損じるな！ シイザ呉々も頼んだぞ。」

「さ、パンス書記官が横合から注意した。」

「黒奴は無言のまま、金貨を受けて、彼の秘密書を懐深く秘めたのであつた。階段、荒く踏み昇る足音して、扉は激しく叩かれた。」

「パンス書記官は椅子を離れながら、」

「誰か。」と誰何した。

「扉は破るが如く押開かれ、三名の獨逸武官は佩劍を鳴らして入り來つた。」

「大使は懇ろに立迎へた。」

「獨逸武官の一人はその面前に進んで、」

「最早退去時間は切迫した！これより直ちにワイスマー港へ向つて出發せよ」

「ければ、二十四時間内に乗船は出來ませんぞ。萬一、嚴達より一秒一分間たり」

「遅るゝに於ては、戰時國際法に照され捕虜となるを覺悟なさい。」

「威嚇的に注意した。」

「露國大使は泰然として答へた。」

「いや其の御配慮には及ばんです！最早、當大使館の引揚げ準備は成りま」

「した。即刻吾々は伯林を出發するです。」

「斯くて、傲慢不遜な獨逸武官が臨檢の下に、大使を始め武官、書記官、其他」

「大使館附の一行は三臺の自働車に分乘し伯林停車場へ向つた。」

「愈々大使館の門前を出づる時、大使は彼の黒奴を呼び寄せて、」

「シイザ！例の秘密事件は呉々も頼んだぞ。」と強く念を押した。

「黒奴は胸を叩いて領いた。」

「御心配は無用に！」

「是れを最後の訣別として、露國大使の一行が、砂塵を捲いて自働車を飛ばし」

「去るさ、是れを見送つてゐた黒奴シイザは、」

「はッはッはッ、馬鹿な奴等だ！」

「流暢な獨逸語で罵つた。」

「其處へ館内から立現れた例の三武官は、」

「おい！ レツクス中尉、萬事上首尾か。」と親しげに肩を叩いた。

「無論だ。」

シイザは我が額を掴むや、其の黒皮を引剥くつた——黒奴の假面はずるりさ

脱けて、忽ち獨逸陸軍中尉レツクスと變じた。

同僚の武官達は、假裝黒奴を取圍んだ。

「ちや、露國大使より秘密書類を奪取けたか。」

「いや。」と、レツクス中尉は頭を掉つて、

「是れより僕は直ちにハンブツクへ向けて出發する。そして、ゴザルコフ書記官が齎らす英政府よりの密書を奪取せんとするのだ。」

第三彈

獨逸軍艦英汽船を襲ふ

駐獨露西亞大使館附一等書記官ゴザルコフが、大使の秘密命令を受けて、英京倫敦へ赴いたのは、愈々獨逸兩國と交戦の曉、英政府が如何なる態度を取るべきか、その交渉を爲すがためであつた。

英吉利は東歐の平和を攪亂する獨逸を、常に蛇蝎の如く憎惡みつゝある上、露西亞とは協商國たる義務もあるので、露西亞が塞爾比の後援として、佛蘭西と同盟し、鋒を取つて立つ以上、これに協力すべきは當然である。

露國大使の秘密命令を受けて入京したゴザルコフ書記官に對し、英國政府は十二分の好意を以て酬ゐた。そして、大使に宛てたる秘密回答を托したのである。

密使ゴザルコフ書記官の満足は此上もなかつた。滞りなく其の使命を果した彼は、直ちに倫敦を辭して、伯林へ歸るべく、ドーバ港より汽船に乗じて獨逸のハンブルク港に向つた。

ドーバ港を解纜した汽船が、二晝夜を閲して、フリシヤ諸島近くを航海中、ヤーマス港より無線電信が到着した。

それを受理した船長は、

「おー！」と叫んだ限り、良暫く二の句が次げなんだ。

折しも船長室に在つたゴザルコフ書記官は、

「船長何うしました？ 何んぞ大事件でも惹起つたてですか。」と沈着な態度で訊れた。

船長の顔色は既に蒼白めて、

「ゴザルコフ書記官——最う一刻も猶豫は能きん！ 昨夜遅く獨逸は貴國露西亞

に對して宣戰布告をしたですぞ。」と言ひつゝ、無線電信に代つて得たる秘密報告を示した。

ゴザルコフ書記官は早晩斯くあるべしと豫期して居たから、更に驚いた様

子もなかつたが、此の汽船が戰宣布告あつてより二十四時間内に、ハンブルク

へ入港なし得ざるは知つてゐる。假令、無事に入港なし得たりとするも、其の

時間を経過し獨逸國沿岸に上陸すれば、敵國官憲の爲めに逮捕さるべ

きは明瞭である。

我れ一箇人として逮捕せらるゝは敢へて怖るゝ處に非ざれど、現在の我れゴ

ザルコフは、駐獨本邦大使の秘密使命を受けてゐるのであるから、迂闊な行

爲をしては、列國使臣の嘲笑を招くのみならず、露西亞帝國の大汚辱となる

のだと、斯く思ひ到つたゴザルコフ書記官は、船長に對つて口を開いた。

「獨逸が宣戰布告をなした以上、英吉利に國籍を有する當汽船が、ハンブルク

へ入港するは危険です。必らず獨逸官憲のために拿捕されるであらうご考へるが、船長の御意見は如何ですか。」

「無論危険です。」

船長は立地に應じた。

「本船をハンブルクへ入港せしむる事は絶対に回避すべきです。それこそ飛んで火に入る夏の蟲の誹を免かれませんか。」

「で、當汽船の進退は？」

「直ちにドーバ港へ引返さうと思ふです。」

ゴザルコフ書記官も望む所である。

「それが最も安全なる策です、今は一刻も躊躇して居る場合でない。速かに船長が最善と信ぜらるゝ方法を盡して頂き度い。當汽船の乗客一同は、貴方に貴重なる生命を托して居るのですから。」

「宜しい。」

船長は椅子を離れた。而して、汽船を逆進せしむべく、機関長の許へ馳せ行かんとする時、

「やあ、大變だ！大變だ！」

こ上甲板の方に當つて、俄かに周章狼狽を極めた人々の叫び聲。

ゴザルコフ書記官も驚いて起上つた。

「彼の絶叫は何んでせう？船長。」

「うむ、容易ならん大椿事が突發したらしい。貴方も一緒にお出でなさい！其の原因を確むべく甲板へ……」

船長 突の扉を突破る勢ひで、二人が室外へ立出てた時、礫の如く機関長が

飛込んだ。

「船長！大事件が湧上りましたぞ。」

「お、機關長——何か。」

「唯今、アムステルダムの方角より本船を目蒐けて、怪艦が襲來せて参ります。」

「其れは何邦の船らしいか。」

「判然しません、何うも獨逸のてはあるまいかと思はれます。」

「何？獨逸軍艦……」

「而も三隻以上らしいです、時節柄決して御油斷はなりませんぞ。」

「可！我輩が行つて確めやう。」

この急報に接した船長は、ゴザルコフ書記官と共に急ぎ甲板へ駈上つた。

甲板は船員や乗客で押合つて居た。何れもがや／＼と騒ぎ立てながら、遙

かの沖合に黒煙を棚曳かす怪艦の望見してゐるが、最う暴慢なる獨逸軍艦と

信じ切つて、其面には縷ほどの血色もない。死の怖れに囚はれて、只最う慌

て騒ぐのみである。

其等の人々を鎮めながら、船長は甲板より橋頭に昇つて行つた。其處に据付

けてある望遠鏡を回轉し、尺度を計つて擬乎と怪艦の方を眺めたが、

「お、猶且獨逸艦隊に相違ない！」と失望の聲を顫はせた。

機關長は船長を仰ぎ見て、

「當船の進退は？速かに御命令を願ひます。」

「全速力でドーバ港へ逆進すべし！この場合、その他に施すべき手段は

ない、跡は天命に任せる而已。」

船長よりドーバ港引返しに命令下るや、

「逆進！逆進！」と叫びながら、機關長は我が持場を指して宙に飛び去つ

た。

突如として、アムステルダムの沖合に現れた彼の怪艦の愈々獨逸艦隊

なりと断定されるさ、今迄でさへ蜂の巢が覆つたやうであつたのが、今度はそれに數百倍の大騒動となり、屈々な男共は、女子供を突飛ばして、我先にと船室へ馳戻り、自分より量高き荷物を抱へ、船内を彼方此方と狼狽へ廻る見苦しさよ!!!

思へ、此處は四面水に圍まれたる北海の真中ではないか。幾程泣き喚くとも獨逸艦隊の襲來を避け、ドーバ港へ引返さぬ以上、船内より一歩たりとも遁れ出づる事は出来ぬのである。

船長は其の一語を繰返して叫んだが、乗客の耳には入らず、騒動は直々甚大くなるばかりであつた。

其の騒動に人の注意を遁れたゴザルコフ書記官は、何處ともなく姿を隠した。

斯かる中に、汽船は全速力を以て、ドーバ港に回避を企てたが、何分一時間十三哩の一商船に過ぎぬから、彼の怪艦より無事に遁れ去るは至難である未だ二時間ならざるに、早くも其の航路は彼の怪艦隊の爲め横断せられたのであつた。

兩船の距離が接近するに従ひ、其の怪艦の如何なるものやは明瞭になつた其れは此方の想像に違はず、獨逸軍艦のゲーベン、プレスロー及び他の一艦である。

英汽船の航路を横断した敵艦隊は、轟然一發、空砲を放つて「停船せよ!」と命じた。

この時未だ英獨は國交斷絶してゐなかつたが、東歐の平和を無視した獨逸艦隊は、此の商船を撃沈若しくは拿捕せんと目論で居るらしく思はれた。

萬事休焉! 今は早や遁るゝに道無しである。彼艦の威嚇的命に服従する

は實に心外ながら、斯くなれば、最早如何とも是非がないのだ。
船長は血涙を呑んで、彼等の命令に屈服したのである。

第四弾 甲板上的大血戦

戦闘力無き英國汽船を包圍し威嚇的に停船を命じた獨逸艦隊は、彼船に於て我が命令に服従せざるを知るや、直ちに數隻の短艇を取卸し、ゲーベン副艦長セシル少佐を指揮官に、武装せる多數の水兵を乗組ましめ、漁船を目蒐けて漕寄せた。
舷門まで出迎へた船長其他重立ちたる船員を、セシル少佐は傲然として見下しつゝ、水兵を引卒して、船上に昇り來つた。而して、飽までも暴慢極まる態度で、

「こら、船長は何處に居るか。」

と呶鳴つた。

船長はゲーベン副艦長の面前に前み出でた。

「お尋ねの船長は我輩であります。」

「うむ、其方か。」

「左様。」

セシル少佐は我が頭上の帆柱高く掲げし國旗を仰ぎ見て、

「彼の國旗に依つて示すが如く、當汽船は英吉利に國籍を有するものであらうな。」

「如何にも。」

と船長は沈着き拂つて頷いた。

「で、我が獨逸帝國が、昨夜、露西亞に對し宣戰布告したを承知か。」

とセシル少佐は訊れた。

「否」

船長は頭を掉つて、

「ドーバ港を解纜致すまでは、本邦政府より何等の通知に接せんでした。併し、先刻無線電信に依り、始めて貴國と露西亞の國交斷絶を承知しました。」

「早晩英吉利も戦争を開始するであらうよ。」

「……………」
是れに對し船長は苦笑したのみで答へなかつた。セシル少佐は重ねて言つた。

「本船は軍事禁制品を塔載して居らう。」

「いや、乗客専用船です。」

「何にせよ、獨露宣戰布告を承知であれば宜しい。我が獨逸艦隊は本船に對し

戰時禁制品を塔載せしものと認めて拿捕するであらう！で、船員及び乗客一同に其旨を報告せい。萬一、此の命令に對し一言たりとも抗議を申出ずれば立地に砲撃開始するばかりぢや。」

と嚴かに言ひ渡した。

船長は無念さに肩を聳かせたが、此の海洋上に於て、敵艦の呪ふところとなつた以上、怒ひ反抗的態度に出づるだけ不利なるを知れば、遂ひに敵の要求を容るゝ事となつた。

「宜しい！」と是非なく頷いて、

「吾々船員一同は敢へて死を怖るゝ處でないが、乗客に過失あつては相濟まんから、貴官の命令に服従します。」

「はッはッはッ、生命が惜しくば然うすべきぢや。」
とセシル少佐は嘲笑した。

この無禮極まる一言！船長は敵に躍り蒐つて、即座に息の根を止むべき手段は知つて居るが、多数の人命を預かれる以上、残念ながら其の壯舉を爲し得ぬのだ。

「これより直ちに當船の船員及び乗客を取調べるから、甲板上へ整列させよ。」

セシル少佐の命令に依つて、船長は船内の人々に對し、早速甲板に集合すべき旨を傳へた。

旋て、船員を前列に、乗客一同は後列となつて甲板に押並んがが、何れも生氣なく縮み上つてゐる。

セシル少佐は船長より提出せしめた名簿に照して、嚴重なる人員點呼を開始した。

最初の船員は無事に済んだが、乗客中に一名の不明者があつた。

その不明となつた一乗客こそ、獨逸艦隊が今日の暴舉に依つて擲得せんとした唯一の目的物であるから、少佐は忽ち變聲を振つて船長を咎めた。

「こゝら此奴を何うした？ 船長、此奴を何處へ匿したか。」

乗客名簿を突付けられて、船長は始めて心注いだ。最前からの騒動で注意を怠つてゐたが、さう詰問されて見れば、其の指示めす乗客の一名が見當らぬ。

斯く獨逸艦隊が來襲せる唯一の目的物——即ち駐獨露國大使館附たるゴザルコフ書記官が不明となつてゐるのだ。

「お、彼の書記官が………」

「何うした？」

「此處に居らん處を見れば、多分その船室に居らうと思はれます。」

セシル少佐は軍艦より引卒せる水兵に向つて下知した。

「それ！其奴を搜索せい。」

一隊の水兵は、船客係の僕を案内に、その一等船室を目蒐けて突進した。

ゴザルコフ書記官の宛がはれた船室は、室内より嚴重に錠を卸せるを覺し

く、如何に打てど叩けど其扉は開くべしと思はれなかつた。

水兵共は銃を振つて、扉を破らんばかり続け打ちしつゝ、

「開けろ！開けろ！此扉を開けろ！」

と連呼したのである。

最前、船長と別れて我が船室に引返したゴザルコフ書記官は、素早く準備

を凝し、今は何時にても敵來れと待ち構へてゐた處で、最後の思ひ出に悠々と

卷簾を燻らせながら、扉外に群がる水兵等を一喝した。

「騒がしい！何をするか。」

「こら、其方は露國大使館附書記官であらうな。」と、セシル少佐は聲高く叫んだ。

「如何にも汝が尋ねる人物であるが、我輩に何の用事があるか。」

「敵國の間諜として逮捕せんとするのぢや。貴様にして我が命令に服従せざる

以上、直ちに當船を撃沈せしむるぞ。」

「黙れ！無禮漢！」

とゴザルコフ書記官は激しく言責した。

「これは英吉利に國籍を有する商船であるぞ。我が露西亞帝國と汝獨逸と國

交斷絶せしにせよ、未だ戦宣告せざる英國汽船に向つて狼藉する法がある

か。」

「否、是れが我が獨逸帝國の戦法だ！何んでも構はん、早く此奴を引捉へる。」

とセシル少佐は水兵に嚴令を下した。

水兵共は再び扉を破らんと競ひかゝつた。其時、船室の扉は室内より颯と開かれた。その機を嗅つて、水兵共は將基倒しにバタ／＼と打倒れた。

唯、それを躍越へて室外へ現れたゴザルコフ書記官は、
「ドイツの犬奴！」

と叫ぶより早く、セシル少佐を目蒐けて短銃を連發した。

「——呀ッ！」

毒々しき血潮はパツと飛び散つた。其の血潮の裡に、セシル少佐は筋斗打つて打倒れた。

斯くも見た水兵共は、何れもゴザルコフ書記官を取押へんと襲ひかゝるを此方は早くも躰を轉して、甲板へ馳出てたが、其處の鐵欄より、逆捲く荒浪の眞中へ飛込んだ。

ドイツ艦隊の忿怒は極度に達した。

直ちにセシル少佐の死骸を守つて茫然たる水兵共を呼び戻すや、戦闘力無き英國汽船を目蒐けて連發に砲彈を浴びせかけた。

現世の終焉を見せたる阿鼻叫喚——船員や乗客が救助を求むる悲鳴を抱擁して、汽船は見る間に千尋の海底に撃沈せられたのであつた。

あゝ、さるにしても彼れゴザルコフ書記官の生死は如何!?

第五彈 母子が失望は如何許ぞ

駐獨大使の一行は、ウイスマー港よりニコライ號に搭乗し、バルチック海を横斷して、無事、露都聖彼得堡へ引揚げた。

それと同時に、露西亞政府は獨逸及び奧太利に對し、宣戰を布告した。痛憤激裂、滿腔の敵愾心は一時に勃發なして、恰も長江の決する如く火山の爆發したる如く、露西亞民族は「獨逸を討てよ！獨逸を討てよ！」と絶叫して、さらでも旺盛なる敵愾心を益々煽り立てた。併し、茲に可憐なさいめたのは、英京倫敦に赴いたまゝ、其後杳として消息を斷つたゴザルコフ書記官の妻子であつた。

露都から凡そ三十哩、瀛車の便を借りれば二時間あまりで往復の出来る場所に、パノヴァオと云ふ村がある。

良人のゴザルコフが、駐獨大使館附として獨逸伯林に赴仕後、其妻のマシヨナは、今年十五になる一子ゴルチャキンと共に淋しく留守をして居た。露獨の風雲が急になるに、この片田舎のパノヴァオ村へも、毎日のやうに露都から新聞の號外が届いた。

其の號外を見る度に、母のマシヨナや、其の愛兒のゴルチャキンは、敵國伯林に赴任してゐる良人たり父たるゴザルコフの身に恙かれと祈り暮した。斯かる程に、露獨の風雲は益々險惡になつて、今では明日にも開戦しやうな風説が高くなつた。けれど、敵國に駐在するゴザルコフからは、祖國に在つて遠く我れを案じ煩ふ妻子の許へは、何等一片の消息さへ無い。

それも其筈である。

先年、駐獨の命令を受けて伯林へ出發する砌、ゴザルコフは妻子に對つて勇氣に満ちた語調強く言ひ渡した。

「マシヨナお前は元よりであるが、ゴルチャキンも能く聞けよ！俺は本邦政府の命に依つて、これより伯林大使館へ赴任する事となつた。お前達は女子供であるから委しくは知るまいが、常に紛擾絶え間なき彼の巴爾幹半島問題が動機となつて、何日何時我が露西亞と獨逸と開戦せんとも限らん。否、近々

の中に必らず其様異變にならうと思ふ。で、俺は駐獨大使館附の一文官であるから、例令、兩國の平和が破裂して開戦しやうと、無事に本邦へ引揚げられはするが、敵手は暴慢な獨逸だけに、如何なる災難を受けて不幸落命せんとも言はれぬ。然し、其の場合には必らず消息する事にする。その消息が無い内は、如何なる風評が傳はつても、俺は無事で居ると思へ。消息なきは無事で國家の爲めに盡して居る證據だ。それを忘れて、決して見苦しい醜態して人に笑はるなよ。」と。

ゴザルコフが獨逸に向つて出立の際、斯う呉れくも言渡してあるので、其の妻子たるマシヨナやゴルチャキンは、未だ伯林より消息が無いので安心はして居るもの、今日此頃の如く、露獨開戦熱が盛になるさ、其處が妻子の美しき情、何として良人たり又父たる人の身の上を氣遣はずに居られやうか。然う恚うする中に、露都にある外務省から、今度駐獨の大使一行を本邦へ

召還し、その歸日は何月の何日と云ふ通知があつた。

マシヨナも喜べばゴルチャキンも安心した。久し振で良人たり父たる人に會へるかと思へば、淋しく主人の不在を守つて居た親子は、最う熱として居られず、直ぐ出迎への仕度して聖彼得堡へ出掛けた。

旋て、大使の一行が歸京する日になつたので、マシヨナ親子は、出迎への人々と一緒に港へ出向いた。

定刻の時間になるさ、遙かなる沖合より勇しく煤煙を上げつゝ、バルチツク海を横断して、駐獨大使の一行を乗せたニコライ號が入港し、

それを見たる出迎への人々は、

「萬歳！萬歳！」

と熱心に打叫んだ。港へ入つた汽船は直ちに棧橋へ横着けされた。そして、眞先に大使、續いて

陸海軍武官、書記官、事務員、其他大使館附の一行は上陸したが、不思議や、マシヨナやゴルチャキンの待つ其人だけの姿は見えぬ。

「若しや見落したのではあるまいか。」

さう思つて、親子は出迎への人々を攝分け、大使の一行に近づいたが、あゝ何處にもゴザルコフは居らぬのであつた。

「ゴルチャキン！」

母のマシヨナは涙聲で、

「父様は何う遊ばしたのだらうね？」

「母様。」

ゴザルコフも母を願つて、

「父様は獨逸からお歸りなさいないんでせうか。僕、大使様にお目にかゝつて父様の消息を聞いて來ませうか。」

「さあ、然でてもして見なければ……」

親子が相談してゐる前を、大勢の出迎人に取圍まれて通りかゝつた大使は早くも其處にゴザルコフの妻子が居るを見て取つた。

「おゝ、これはマシヨナ夫人！」

「大使様。」

ゴザルコフは町重に挨拶した。

「御無事に御歸國遊ばしてお芽出度う存じます。それに就て鳥渡お伺ひ申し度いのは。」

「ゴザルコフ書記官の事であらうな。」

「はい、御一行の中に良人の姿が見えませんが……ゴルチャキンも父を心配して居ります。あの、ゴザルコフは御一行と遅れて戻りでも致しますか。」

「うむ、其件に就ては秘密に話すべき事がある。さあ、ゴルチャキン少年も我

輩と一緒に來なさい」

さう言ふ大使の面は深い愁雲に鎖されて居た。

それを一目するさ、マシヨナもゴルチャキンも、良人たり父たる人の身に、或る悲劇も起つたに相違ないと感じたが、長もゴザルコフ書記官の妻子であるこの多くの群集で、涙一滴たりと零すやうな女々しい様子は見せなかつた。

第六彈 夜毎に見る怪しき父の夢

駐獨大使一行の召還と同時に、露西亞帝國は獨逸兩國に對して宣戰布告をなしたは先に述べた通りである。

それに相次いで、北海に於ける英國汽船が、獨逸軍艦の爲めに撃沈せられた事が發表せられた。而もその汽船には、駐獨大使館附一等書記官が乗込ん

で居たが、同人は汽船の撃沈と共に生死不明となつた旨が記されてあつた。

獨逸伯林より本國へ召還された大使より、ゴザルコフ書記官が生死不明の消息を洩らされた其の妻子は、筆紙に盡し難い悲嘆に沈んだ。

「憎むべき獨逸よ！父の仇なる獨逸よ！この怨恨は死すとも忘れまじきぞ！」

これぞ少年ゴルチャキンが、父の生死不明を聞いて第一に洩らした言である併し、父のゴザルコフが獨逸へ赴任の際、自分より消息の無い間は無事と思へと言ひ残されてあるが、敵艦の爲め其の乗組める汽船が撃沈されたとすれば無論、故郷へ寄する遺言状を認める折がなかつたさは誰しも想像さるゝ處である。

大使は斯う言つた。

「本國より召還せられ、愈々伯林を出發の砌、黒奴シイザなるものに密書を持たせ遣つたから、確かにゴザルコフ書記官が、北海に於て沈没せる汽船

運命を俱にしたものなら、其の黒奴より何か消息がある筈である。それが無き中、ゴザルコフ書記官の死を信ずるは早計であるから、決して心配せぬやうに……」と。

成程、さう云はるれば其處に又た一理無しとは言はれぬが、父のゴザルコフ書記官が、ドーバ港より英國汽船に乗込んだのは事實で、其の汽船が獨逸軍艦に撃沈されたのも事實である。

而して其の汽船に在つた船員及び數百の乗客が悉く溺死したのは、英吉利政府の確認する處だ。

怨恨を吞んで北海の藻屑となつた數百名の人々——其中から我が父一人が助からうとは、天祐ならでは信ぜられぬ。

あゝ無慘！マシヨナもゴルチャキンも、其の良人たり父たる人の死を認めぬ譯には行かなかつた。

駐獨大使より慰められ、涙ながらに故郷のバノザオ村へ戻つたマシヨナは其れが原因で遂ひに重き病氣の床に倒れた。

父は生死不明となり、今又た母に病み付かれたゴルチャキンは、血の涙を擽つて天の無情を怨んだ。

父の生死不明、母の重病、これも皆な敵國の爲したる所業である。我れは今年十六歳の少年なれど、我が牀には不屈不撓のストラブの血が流れてゐる。

日本に大和魂あるが如く、我れにはストラブ魂がある。嗚呼此の尊きストラブ魂を有する我れゴルチャキンにして、祖國の敵、父の仇なる獨逸の暴慢を取挫がずに置かれやうか。

母の重病と云ふも、父が生死不明となりし爲めである。其の乗組める英國汽船は敵艦の撃沈する處とはなつたが、未だ父ゴザルコフが死せしや否は不明であるのだ。萬一、好運にも父が死なすにあると知れたら、母の重病は立地に

平癒するであらう。

さらば、自分は是れより父の生死を確める爲め敵國獨逸へ押渡り、首尾よく邂逅すれば可し、萬一、父にして死せしならば、切めて其の遺骨だけでも持ち帰り度い。

斯う思つた少年ゴルチャキンは、秘かに出立の準備をなしたる上、折を見て母の病床に進み寄つた。

「母様、今日は御氣分は何様ですか。」

我が子に病状を問はれた母のマシヨナは、疚しげに病床から起返つた。

「あゝ、お前が日々の看病で、昨日あたりから大分快くなりましたよ。」

「それは好い鹽梅です！母様、何うぞ一日も早く快くなつて下さい。」

「私もそれを神様にお祈り申して居ますけど、他の病氣と違つて……斯う苦勞が絶えなくては、何時になつたら元の健康になれるか知れないよ。」と云つて

つて潜然と落涙した。

「矢張り父様の消息がお氣に掛るんですか。」

ゴルチャキンは母を噴めた。

「ほんまに何う遊ばしたらう？私には、お前の父様が北海道でお死なすつたとは思はれない。こんな事を云ふさ、お前は迷信ださ笑はうけど、私はこの節毎晩のやうに不思議な夢を見ますのよ。」

「え？夢を？」

母の言葉が、ゴルチャキンの胸に轟と當つた。その夢さは如何なるものか、未だ聞かれれば知るに由無いが、實はゴルチャキンも、此頃になつて毎晩のやうに父の夢を見るのである。

夢は五臓の疲勞で、元より信するには足らぬさは思へど、不思議なる事には其夢が毎晩々々同じものなんだ。

それは今より三年前、父が駐獨大使館附となつて赴任せし折の儘なる姿で、肩から胸部へかけて眞紅の血潮が一條、煙の如く朦朧として我が枕頭へ現はれ、

「來れ！ゴルチャキン——北海へ！北海へ！」と繰返して言ふのであつた。

最初の一夜は、父を追慕の餘り夢見たのだと思つたが、それが二晩三晩と度重なるに連れて、ゴルチャキンは、父は北海の藻屑とならず、敵の爲めに捕虜となつて、何處かに幽閉されてゐるのではあるまいかと思ひ到つた。萬一、それが正夢とすれば、自分は子たるもの、義務として身命を擲つても、父を危難より救ひ出さればならぬのだ。斯くて、ゴルチャキンは敵國へ赴かんと決心したのである。

然るに、今、母の言葉を聞けば、我れと同じく父の夢を見たさ云ふのだ。

ゴルチャキンは再び椅子を前めた。

「母様が御覽なすつたとは何様夢ですか。」

「それがね、ほんとに妙なのだよ。」

母のマシヨナが物語を聞けば、自分の幾夜も繰返し見し夢と寸分の相違もないのであつた。

「あ！實に不思議です。」

ゴルチャキンは我れを忘れて叫んだ。

「それと些とも違はぬ父様の夢を、僕も四五晩續けて見ました。」

「まあ、お前も。」

と母のマシヨナは驚き顔。

「其夢に就て、今日僕は母様にお願ひがあります。」

「お前の願ひとは？」

「母様御安心なすつて下さい、親子とも同一つ夢を見ると云ふのは、必らず父

様が生きて居られる證據です！併し、敵のため北海で汽船は撃沈されたんですから、父様は御無事でも敵の捕虜になつて、非常に苦勞をなすつてゐる事さ思ひます。それで、僕に救助に来るやうにと夢枕に立たれたんでせう——否屹度さうに相違ない！で、僕は父様を救ふ爲め是れから敵國へ乗込まうと決心しました。御病氣中の母様一人を残して行くのは不孝ですが、父様の危難を救はうとすれば是非がありません。母様お願ひします、何うか僕に暫くのお暇を下さい。」

とゴルチャキンは、勇しき決心に輝く面を上げて、病床に呻吟する母に希望を打明けた。

母のマシヨナは、さう願ふ我が子を凝然と見詰めたが、

「お前は自分の生命を的にして、父様の御危難をお救ひ申す決心かい。」

「無論ですとも！」

と潔く打領く。

「お、能く言つてくれました。」

母は嬉し涙に搔暮れて、

「それこそ私の方から頼まうとまで思つてゐたのですよ。ゴルチャキンや、母様の病氣などは少しも心配する事はないから、お前は今日からでも直ぐ敵國へ出立して下さい。」と言つた。

第七弾 天運盡きしか遂に捕虜

怒濤天に轟く北海に於て、獨逸艦隊の砲撃を受けた英國汽船が沈没するに先ち、セシル少佐を一撃の下に射倒し、自ら海中に飛入つたゴザルコフ書記官が其後の運命は如何！

彼は運命を天に任せて、この冒險的勇氣を振起したのである。ゴザルコフ書記官にして斯く斷行せずば、見す／＼敵の捕虜となるべきは知れてゐる普通、文官たるものが敵の捕虜となるは差したる不名譽ではない。如何となれば、それは最初より戦闘力なき人間であるからだ。だから、生命を惜しむ弱者なら、無論、敵の爲すまゝに任せるのだが、ゴザルコフは文官ながら、大抵の武官よりは遙かに豪膽であつた。

それを見込まれて、駐獨大使館附の海陸武官があるにも關らず、特に大使の秘密使命を受けて、英京倫敦に急行したのである。然るに、未だ伯林へ歸らぬ先に、獨逸は祖國露西亞に對して宣戰布告をなした。そして北海に艦隊を出動せしめて、英國汽船を威嚇したのだ。

獨逸艦隊の行爲は無論暴戻極まりと云ふべきだが、一度、國交斷絶せし以上は交渉や談判如きでは解決が附かぬ。何んぞ云つても武力に依つて雌

雄を決する外に執るべき手段はない。

理屈は兎も角として、船上より北海の荒濤の中に飛入り、辛くも敵の捕虜となるを脱したゴザルコフ書記官は、如何にしても此の死境を脱して、自分の使命を完ふせねばならぬと思つた。

自分は我が駐獨大使より特別なる秘密命令を受けてゐる身だ。英吉利政府よりの回答を大使に傳へれば、獨逸に對して開戦すべき祖國の爲め大いなる不利が生ずるのである。

此の使命さへ完全に果せば、自分は北海の藻屑となるも更に心残りはない。然し、今は此儘で有耶無耶に死す事は能きぬ。

「何うしても俺は死なれんぞ！」
さう思つたゴザルコフは、最後の大勢力を振起し、首尾好く敵艦より遁れて生還せんぞ企てた。

此の死境を脱せんぞ欲せば、何うしても手近の島に泳ぎ付く外ない。
それは何處だ？フリシヤ群島である。自分の在る位置からフリシヤ群島中
で一番近い島に泳ぎ着くにしても、未だ二十哩以上を隔てゝゐる。
五哩や六哩なら泳ぎ着ける見込みはあるが、二十哩とあつては逆も成功は覺
束ない。否、全然不可能である。

覺束ないとも知れてゐる、不可能とも知れてゐる。それは十分に知れては居
るが、今の場合、フリシヤ群島へ泳ぎ着くより外に生還すべき方法が無いの
で、譬へ溺死するまでも、其島近く泳ぎ着かざるべからずと決心し、用意の
浮袋に命を托して泳ぎ出した。
山成す怒濤と闘ひつゝ、漸く三哩ばかりも泳ぎ抜けた時は、既に身心とも綿
の如く疲労したが、
「何を！」

と云ふ例のスラブ魂を揮つて、唯先へく怒濤を突破して猛進した。

此方は彼の獨逸艦隊である。

ゴザルコフ書記官を捕虜にせんとなし、却つてセル少佐を銃殺され、其の
怨恨を霽すべく英國汽船を撃沈したが、それで満足して引揚げんさほしな
かつた。と云ふは外でもない、艦隊が突如として北海へ出動したのは、敢へ
て一汽船を拿捕や砲撃せんが爲めではない。

實は本國政府よりの急電に依り、其の汽船に乗込めるゴザルコフ書記官を逮
捕せんとするに外ならぬのであつた。

駐獨露西亞大使館へ黒奴となつて入込んだ、獨逸陸軍中尉レツクスは、
大使一行が伯林を引揚げると、直ちに陸軍省へ出頭して、敵國大使が英京
倫敦へゴザルコフ書記官を密使として派遣した事を報告したので、彼さへ捕

ふれば、英露兩國間に如何なる秘密條約があるかは明瞭になるので、直ちに無線電信を以て、ウイルヘルムス・ハーヘン港に在る艦隊に、英國汽船拿捕の嚴命を下したのである。

此の特別命令に接したる艦隊は、直ちにフリシヤ群島沖に出動した。而して今やドーパ港へ引返さんとする英國汽船に追ひ着いたが、其の目的物たるゴザルコフ書記官を取逃がした。

其の腹立紛れに汽船は撃沈せしめたが、そのみでは折角出動した甲斐あらずとなし、切めては自ら海中に投じた彼の死骸なりを搜索し、其の所持せる秘密書類を奪はんと企てた。

彼の獨逸艦隊は、英國汽船を撃沈せしめた後、ゴザルコフ書記官の行方を搜索すべく、直ちに數隻の短艇を派遣して、フリシヤ群島の近海を縦横無盡に漕ぎ廻つた結果、未だ死せず浮袋に生命を托し、怒濤の間を漂流してゐるを

発見し、

「それ捕虜にせよ。」

さばかりに追撃して、遂に彼を船内に引摺上げた。

最後の努力——ゴザルコフ書記官は激しく抵抗したが力及ばずして、遂に敵の爲め生きて捕虜の恥辱を被つたのである。而して、彼は永久の暗黒界たる、リュゲン島の海底牢獄へ投込まれた。

第八彈 祖國の敵を父の仇を

露獨の國交斷絶——北海に於ける英國汽船の撃沈——駐獨大使館附ゴザルコフ書記官の行方不明——續いて同書記の捕虜——リュゲン島海底牢獄に於て銃刑の風説——其等の事件が聖彼得堡で發表せらるゝ毎に、スラブ民族の獨

逸に對する敵愾心は白熱の如く高まつた。海にも陸にも戦雲漲つて、リバ
ウ軍港には精銳なるバルチック艦隊が集合し、命令一下、直ちに出動すべき
準備に忙殺された。

バルチック大艦隊が、リバウ軍港に集合したと云ふ事が露都の大評判と
なつた時、ゴルチャキン少年は既に聖彼得堡から同軍港に急行の途中であつ
た。

病中の母マシヨナの許可を得て、父ゴザルコフの行方を尋ねべく、故郷を跡
にしたゴルチャキンは、如何なる艱難辛苦なすとも敵國に赴かん覺悟したの
である。

漸くりパウ軍港へ到着したゴルチャキンは、駐獨大使の紹介状を携へて
バルチック艦隊司令長官の許を訪れた。

普通なら知らぬ事、多忙を極めつゝある戦時中、シリツ司令長官が斯か

る一少年に面會してある寸暇も無いのだが、無二の親友よりの紹介である
から、快くゴルチャキン少年に面會してくれた。

シリツ司令長官は、少年の差出す親友の紹介状を受取つて一讀したが
太くも打驚いたる跡で、

「お、お前がゴルチャキンと云ふか。」

「然うです！」

ゴルチャキンは忝しく一禮した。

「するさ、駐獨大使館附であつたゴザルコフ書記官の子息ぢやな。」

「はい。」

司令長官は改めて此の少年を見遣つた。

「成程、さう聞けばゴザルコフ書記官に酷似ぢや！我輩はお前の父様には先
年伯林で面會した事がある。」

「その父は今生死不明になりました。」

ゴルチャキンは悲憤の涙に打咽ぶ。

「其件に就ては實に氣の毒に思ふ！然し少年よ、お前の父は敵の爲め捕虜となつたが、確かに生きて居るから落膽せんが宜い。で、紹介状には本人の希望とする所は直接聞取りくれよと書してあるが、其の願ひさは何う云ふ事か。」

ゴルチャキンは屹と面を振上げて、

「シリツ提督にお願ひさば他でもありません。今度獨逸と北海で海戦する時、僕を戦場へ連れて行つて頂き度いんです。」

「それは如何なる理由で？」

「僕は父の生死を確めたいんです。父が柏林から倫敦へ参り、其の歸路に乗込んだ英國汽船は、北海で獨逸艦隊の爲め撃沈させられたと聞きます、そして父は其場から生死不明になりました。けれど、昨日の新聞號外で見ると、父

は敵の捕虜となつて、リュゲン島の海底牢獄へ監禁されてあると云ふ事ですが、眞實、捕虜となつたか或ひは北海で溺死したかは解りませんが、僕は其の生死を確めたいと思ひます。」

司令長官は、少年ゴルチャキンの希望を委細聞取つた後、

「有繋はゴザルコフ書記官の子だけあつて勇ましい。然し、お前は病中の母を故郷へ残して来たさ云ふではないか。今度我がバルチック艦隊が、祖國に仇なす獨逸艦隊と戦はんさする以上、飽迄も名譽ある勝利を期して居るが、戦争の勝負は天運にあるので、或ひは不幸にも敗北せんとは限らん。それさても陸戦ならば生還する望みもあるが、海戦では艦と生死を共にせんでばならん。萬一、斯くの如き敗北の場合、お前は再び母に逢ふ事が出来なくなるぞ。」

「それは決心してゐます。」

ゴルチャキンは勇しく答へた。

「母は其れを承知して、僕が父の生死を確める事を許してくれました。母と別れて故郷を跡にすると共に、僕は決死の覚悟したんです。」

「うむ、母も快く承諾したと云ふか。」

「左様です！だから僕は祖國のバルチック艦隊と運命を共にしやうと、遙々提督をお訪ねしたんです。」

「それは痛快ぢや。で、お前は今年幾歳になるか。」

「十六歳になります。」

「十六歳にしては中々膽力が据つて居る。お前の小さな躰には、堂々たる男子も及ばぬ立派なスラブ魂がある。」

「僕は幼さい時から、父や母に種々戦争の話を聞きました。」

「何う云ふ戦争の話ぢや。」

「それは澤山あります。その澤山聞いた戦争の中で、一番僕が感動したのは

日露戦争です。我が露西亞は、東洋の日本に較べると、二十倍も三十倍も大きい國です。その露西亞が豆粒の如き日本の爲め、海でも陸でも散々に打負かされたと云ふ事です。何うして大きな我國が小さな日本に負かされたか云ふそれは日本には大和魂と云ふ立派な寶があつたからです。我國にもスラブ魂があつたのですが、敵を小國と見くびつた爲め、國家を大事に思ふ大和魂を有つ日本に敗北したんだと聞きます。だから、お前も祖國が大事と思つたら大和魂の如く立派なスラブ魂を練えろと言はれました。僕は其父の言葉を能く覚えてゐます。今度の獨逸との戦争に負けるやうな事があつては、もう露西亞は世界の一等國と慢る事が出来なくなりません。十年前の戦争に負けた日本に對しても恥かしく思ひます。けれど、僕は未だ十六歳の少年ですから、軍人となつて戦争に出る資格はありませんが、父のゴザルコフは文官ですか、今度の露獨戦争の眞先に祖國の犠牲になりました。未だ死んだとは極められな

いが、北海で敵艦に撃沈させられた英國汽船に乗込んでゐた以上、海底の藻屑となつたか、それとも敵の捕虜となつたか二つに一つです。過般から新聞の號外で見ますと、何うも父は敵の捕虜となつて、リユゲン島の海底牢獄に監禁されてゐるやうです。提督へ御紹介して呉れた大使のお話では、父は或る重大な命令を帯びて英吉利へ行つたので、萬一、敵の捕虜となつて其の秘密書類を奪はれるやうな事があれば、露西亞の爲め大損害になるんだと聞きました。だから、敵から父を奪ひ返さうと決心したんです。斯う云ふ譯でありますから、僕を戦争にお連れ下さい。」

とゴルチャキンは熱心に言つた。

祖國を愛し、父を慕ふ勇敢なるこの少年の希望！それを、何としてシリツ提督が排斥しやうか。

「可！」

と強く頷いて、

「安心せい！お前の希望を容れて遣る。」

第九彈 永久暗黒なる海底牢獄

上にカイゼル陛下を戴く獨逸は、世界の尙武國だが、又一面からは禮節の正しい優美な國であるさ自慢して居た。

尙武國たるは十指の指す處だが、彼は禮節を重するやうな優美な國ぢやない。一言にして評せば、獨逸は悪魔の巢窟である。而して、血を見る事を好む大々的野蠻國である。

其の證據には、今度の戦争の遺口を見ても解らう。

彼は同盟國たる奧太利を助くべく義兵を擧げたと喚いてゐるが、其れは

狼が衣を被て欺かんとするに同一で、貪婪飽く事知らぬ自己の腹を肥さんとする野心に外ならぬ。

海には勇猛なる艦隊あり、陸には精銳なる軍隊あり、兩手に是れを携けて威嚇したなら、世界の國々で矢面に立つものはあるまい。而して奧太利を使嫉し塞爾比と戦はし、自分は濡手で粟の掴み取り、巴爾幹半島を横領しやうと企てたんだ。

然るに露西亞は塞爾比を助けて蹶起した。續いて佛蘭西も鉞を向けた。英吉利も勘忍袋を切つた。

「此様答では無かつたが……」

と今更悔んでも後の祭である。

斯うなれば死物狂ひだ。彼は海に英國汽船を威嚇し、佛蘭西沿海を砲撃し、陸では白耳義其他の中立國を侵犯して、有ゆる狂暴を逞ふした。

併し、其後海に陸に戦ふ毎に見苦しき敗北を重ねた。堂々たる戦争では最初から勝算覺束なしと知つた獨逸は、何か敵の弱點を突く奇策はないかとか案の末、北海にて捕へたゴザルコフ書記官を、直ちにリュゲン島の海底牢獄へ監禁した。

彼ゴザルコフ書記官が、駐獨露西亞大使の密使となつて英京倫敦へ赴いた時、黒奴に假装したレツクス中尉は、逸早く陸軍省へ報告したので、其の歸路を待つて引捉へれば、露西亞と英吉利の秘密條約を握む事が出来る。さうなれば、策戦計畫上、非常な利益を占む事が出来るので、狂亂的暴行の結果、當初の目的通り北海に艦隊を待伏せしめて、英國汽船を撃沈の上、遂ひにゴザルコフ書記官を引捕へた。

然しゴザルコフ書記官は早くも獨逸の野心を觀破したので、北海の怒濤に漂流中、英吉利政府よりの秘密書類を奪取せられざるやう、自ら左手の肉を裂い

て密書を押込み、其上を手帛で縛りつけたので、首尾よく発見せられずに済んだ。そして、敵より如何に嚴重なる拷問に處せられても、國家の面目を蹂躪するが如き言は吐かなかつた。

其の結果、永久の暗黒界たるリユニオン島の海底牢獄に投じられたのである。

此のリユニオン島牢獄は、獨逸政府が國事犯人を監禁する目的で建築したもので、島の外面から見れば何の變つた所も見えぬが、地底及び海面下に幾多の恐るべき監房が設けられて、戦慄すべき海底牢獄と呼ばれて居る。

何人にも、獨逸官憲の捕ふる所となり、一度、この海底牢獄に幽閉せられた以上、縲ほどの日光を見る事も得ず、空しく冷かな石室裡に悶死するのだ。

それほど嚴重な牢獄であるから、如何なる悍猛の大悪漢も、此獄へ投込まれ

たら往生で、設後三百年の今日まで、未だ嘗て脱獄に成功したものがない。

其の海底牢獄へ、ゴザルコフ書記官は監禁されたのである。

而も彼の監禁室は、海底牢獄中の最下室で、四角な六尺箱を置いたほどの狭さの上、其の四圍は數尺の厚さある石壁に取圍まれ、水平線より十數尺の海底に在るから、生簀に投入した魚よりも悲惨であつた。けれど、ゴザルコフ書記官には燃ゆるが如き愛國心がある。確固不拔なスラブ魂がある。

自分は重大なる使命を帯びて居る身である。英吉利政府より受取つた秘密書類を、本國政府に届けぬ以上は、無惨々々海底牢獄裡に死骸を横へる事は出来ぬのだ。

「如何なる艱難辛苦しても、俺は此の海底牢獄から脱出するぞ！」

さ心裡に絶叫を絶たなかつたが、さて遺憾乍ら其の脱獄方法は無かつた。それに投獄せられし以來、第一に困難を感じたのは、時刻の経過である。

前にも述べしが如く、この牢獄は海底に建設せられしものであるから、何時
が日にも天日を拜す事が出来ず、果しなき暗黒が永久に續いてゐるので、何時
が何時まで晝夜の區別が無い。

あゝ、リユゲン島内に海底牢獄が建設せられしより三百年、茲には一道の
光明も射し入らぬ、無窮より無窮に續く暗黒——其の暗黒の海底に在つて、
祖國を愛す熱涙に咽ぶゴザルコフ書記官の無念さ残念さは幾許であらうぞ！

「えゝ！斯うして生きてゐるより自殺した方が勝しだ！」

さう思つた事も幾度か知れぬが、

「否！否！我れは重大なる使命を帯びた責任重き身だ、生は易く生は難し
は此處である。身命を賭して戦へば如何なる敵にも打勝てると同じく、決死の
覺悟を以て突進せば、如何に嚴重なる海底牢獄たりとも脱出せられぬ道理
は無いのだ。我が生命は元より祖國に捧げたものである。可！俺は必らず脱獄

して、獨逸の奴輩に威大なるスラテ魂を示してくれやう。」と思つては、自殺
を斷念するのであつた。

自殺を斷念すると同時に、海底牢獄脱出の念は愈々高まつた。而し、
それには或る機會を掴み適當なる便宜を握らなくては駄目だ。

ゴザルコフ書記官は、浪の音より外に訪るゝ物なき海底牢獄に在つて、專
ら其の機會の到達すべきを待つた。

「果し、其の希望するが如き脱獄の機會は來るであらうか。开は天祐と運命
に任する外はない。」

第十彈 假裝黑奴に密書を奪はるゝや

永久天日を拜し能はざる海底牢獄

此獄にゴザルコフ書記官が幽閉せられてより、凡そ一週間餘を過ぎた或日である。

偶と鐵扉を叩いたものがあつた。

それは、晝夜二回一握のパンを投入る、監守の訪れだ。是れに依つて僅かに日の經つを知るゴザルコフは、

「今日も又た煩悶を繰返して、無意味に一日を過したか。」

さう思ひつゝ、狭い監房内の石壁に凭れ身動きもせず沈黙してゐた。

するさ、果して一握のパンは暗黒の監房内に投込まれた。

平素は其儘で直ぐ立去るのだが、今日は何うしたものか、監守は扉外に在つて、裡の動靜を窺つて居るらしい。

それが五分間十分間と過ぎてても立去らぬのだ。

ゴザルコフは始めて口を開いた。

「準備は好いぞ！」

「……………」

「準備は好いぞ！」

「……………」

「準備は好いぞ！」

三度重ねて繰返したが、扉外の監守は答へもなく暗黒裡に佇んで居る。

彼が「準備は好いぞ」と繰返し叫んだ意味は、毎何時たりと死に對する覺

悟は出来てゐると云ふ事である。

海底牢獄へ投込まれた以上、何時かは敵の手に依つて其の生命を絶たれる

は豫期するところである。ゴザルコフは其れを知つての上、斯うして監守に注

意を與へたんだ。

然るに、監守は依然沈黙して居る。

例令、微光たりとも洩入る隙があつたら、其れを便りに何者なるかを見極むべき方法もあるが、此獄は暗黒に支配された海底牢獄である。扉外より聲を掛けざる以上、其の何人なるかは判断する事が出来ぬ。然るに扉外の監守は飽までも沈黙を守つてゐる。

ゴザルコフも遂ひに沈黙した。牢獄の内外に在る兩人が沈黙を續けてゐるさ、頭上遙かに荒れ騒ぐ怒濤の響が物凄じく耳に通ふ。

——死よりも重苦しい沈黙の五分間——
突如、奇聲は此の沈黙を破つた。

「——ゴザルコフ書記官殿！」

それが、獨逸語ではない、異いアクセント乍ら懐しき露西亞語であつた。あゝ祖國の言！呼びかけられたゴザルコフの驚きは、抑も如何許であつた

らうか。

彼は我知らず鐵格子の許に隣り寄つた。

「誰だ！」

「——ゴザルコフ書記官殿、貴下様には手前が何者かお解りになりませぬか。」

再び沈黙は繰返された。

暫くして、

「何うも解らん！一體、汝は何者か。」

とゴザルコフが言つた。

「唯今手前の正體を御覽に入れます。」

怪しき人物は斯う言つて、バツと懐中電燈を照した。一道の光明は暗黒を破つて迸つた。

その光を便りに扉外を見透したゴザルコフは、

「お、汝は……」

「お解りになりましたか、シイザで御座ります。」

シイザ！シイザ！確かに黒奴シイザである！餘りの意外さに、ゴザルコフは

暫し口も利けなかつた。

「シイザ！汝は何うして此獄へ……」

黒奴シイザはゴザルコフの驚愕を手真似で制止した。

「手前は昨日からこの海底牢獄の監守となつたのであります。」

「何うして？」

「御恩に預つた貴下様をお救ひ申す爲めに。」

「それは事實か。」

「嘘だと思召したら、まづ是れを御覽下さい。」

黒奴は懐中を掻探つて、一通の密書を取り出し、それを鐵扉の間より投入した。

何事かご待兼ねて受取つたゴザルコフは、懐中電燈の光を便りに眺めた。

それは、駐獨大使より自分に宛てたる密書である。

手早く封を切つたゴザルコフは、密書の内容を一覽した。そして「例令自分

は救はれずとも希望は貫徹した！」と思つた。

「ゴザルコフ様！」

扉外の黒奴は聲を秘めて言つた。

「手前が何うして此の海底牢獄の監守になつたかは、今更察々しく申上げ

ずとも、大使様よりの御書面でお解りの事と思ひまする。」

「うむ、シイザ！」

ゴザルコフは感謝の涙に昏れて、

「汝は黒奴には似合はぬ感心な心掛けた！俺は汝の厚意を有難く思ふぞ。」
と言ふより外はなかつた。

「否！」

黒奴は頭を掉つた。

「これも伯林の露西亞大使館に御奉公中、誰よりも旦那様に厚い御最負になつたお禮心であります。ですが、ゴザルコフの旦那様、御本國にお引揚げの大使様とお別れ申し、手前が貴下様に御面會致さうと存じ、今日まで艱難辛苦したのは容易の事ではありませぬ。それでも斯うして御面會が出来たので其の艱難の甲斐はありました。」

「實に有難い。」

ゴザルコフは再び感謝の辭を繰返したが、旋て改めて訊れた。

「其後東歐の風雲は何様動靜か。」

「何からお話申上げたら宜しいか、恰て蜂の巢が轉動つたやうな大騒動になりました。」

「愈よ本國も宣戦布告したか。」

「唯今より五日程前に……で、敵方は獨逸に墮太利、土耳其と伊太利、御本國の味方は佛蘭西ばかりであります。何しろ大使様も信賴に遊ばしてゐた英吉利は、ゴザルコフの旦那様が生死不明になつた上、御本國露西亞の旗色が宜しくないを見て、今では獨逸の味方をするやうな動靜であります。而して、佛蘭西は獨逸の陸軍に破られ、御本國の艦隊は獨逸の海軍に不意を突かれて散々の敗北！残念ながら今度の戦争には勝利の見込がないと、露西亞も佛蘭西も憶病風に吹捲られてしまひました。」

「何？露佛の陸海軍は獨逸と戦ひ、何れも見苦しき敗戦したと云ふか。」

「ゴザルコフは無念の拳を握緊めた。」

「露西亞最負の手前までが、豫想外の見苦しい敗戦に口惜しくてなりません。」と、黒奴は飽迄も誠しやかに語りつづけた。

「今日の状態で最う一週間も経ちますれば、露西亞も佛蘭西も狼に逐はれた小羊の如なもので、逆も勝算はあるまいと存じます。だが、ゴザルコフの旦那様、此處に一つ獨逸に勝つ手段があります。それは手前から申上げるまでもなく、英吉利を御本國の味方に引込む事でございませぬ。」

「然し、其の英吉利は裏斬したまふてないか。」

「確かに裏斬を致しました！けれど、唯今の處では獨逸や奧太利の味方となつた譯ではななく、局外中立とか何さか申す事で、何方へも手助けせず、戦争の見物を致して居ります。總ては勝利の見込みある方へ味方するであらうと存じますか……。」

「實に憎むべきは英吉利だ！能くも露西亞帝國を賣つたな。此怨みはスラブ魂

に續付けて、百年の後までも忘れんぞ。」

ゴザルコフは悲憤の涙に咽ぶ。

茲ぞとばかり黒奴は強く言出した。

「其の御無念は御道理であります。御本國露西亞や佛蘭西とは兄弟のやうな英吉利が、其様曖昧な態度を致しますのも、大使様の御命令で、貴下様が英吉利と秘密に御條約なすつた書付が無いからであります。茲に其折の條約書さへあれば、其れを楯として何様にも英吉利を説付けて味方にする事が出来るさ、御本國では血眼となつて貴下様の御生死を氣遣つて居られます。あゝ！その

ゴザルコフの旦那様は、此の海底牢獄に監禁されて居られるのだから……：……：幾程残念無念と思つても、今度の戦争には勝利の見込みが立たうとは思はれませぬ。」

今や黒奴シイザより、悲惨極まる祖國の戦況を聞いたゴザルコフの思ひは如

何？彼の熱腸は寸断されるより幾層の苦痛であつた。

信賴せる英吉利の裏斬——あゝ英吉利を祖國の味方とせれば、露佛兩國は彼

の暴戻なる獨逸の爲め蹂躪せらるゝのである。

我が左手の傷口には、英露兩國が同盟して敵に當るべき秘密書類が押込んで

ある。

この條約書さへ發表すれば、英吉利は我が露西亞と相提携すべき責任がある

而して佛蘭西と三國同盟の上、獨逸に當れば立地に敵國をして我が膝下に

跪かせ得るのだ。

然るに、其の重大使命を受けたる我れゴザルコフは、敵に捕はれて此の海底

牢獄に囚はれて居る……あゝ此獄を脱出し、祖國の急を救ふべき方法はあ

るまいか。

第十一彈 眞に是れ生死の境

否！敢へて憂ふる勿れ。其の方法はある。

「曰く海底牢獄の脱出！」それだ。

ゴザルコフは黒奴に向つて言つた。

「シイザ！お前は此獄の状態を十分知つて居らうな。」

黒奴は此の一言で、早くもゴザルコフの希望を觀破した。觀破すると同時に

其の面上には鐵の如く冷酷な嘲笑が浮んだが、懐中電燈の光は獄内を照す

のみで、扉外に佇つ彼の方は反對に暗が濃いから、ゴザルコフには黒奴の態度

を見る事が能きなかつた。

黒奴は其面に現れた冷酷な表情さは反對に、口先には飽迄も熱烈を装ふ

てゐる。

「手前は昨日初めて海底牢獄の看守を命ぜられました。で、未だ十分に状態を探るまで手の届かぬのが自分乍ら残念に思はれます。」

「然し、お前は先刻俺を救ひに来たと言つたな。」

「無論、ゴザルコフの旦那様をお救ひ申す決心であります。だが、其の手段が無いに苦しみます。」

「いや、脱獄せんさする決心あれば必らず断行されるものだ。お前が此の鐵扉さへ開けてくれれば、跡は俺が逃走して見せやう。」

「ゴザルコフは鐵石の如く固き決心を示した。」

「駄目です、駄目です。其様事では駄目であります。」

黒奴は言葉急しく遮つた。

「この海底牢獄を數百名の武装衛兵が警戒してゐます。彼等の銃先を遁れる

のは不可能です。」

「何有、心配するな！」

ゴザルコフは嚴かに斷言した。

「例令、幾百の武装衛兵が居やうさ、此獄と海さは幾程も離れて居らん。逃げんとする者さ衛る者だ。如何に嚴重に警戒するとも、何時か衛る者には油斷

が出来ぬ。其隙を窺つて一散に海中に飛入り、其後は天運に任せるのみだ。」

「成程、其の御考量は至極妙であります。だが、此のリユゲン島の周圍には、何時も獨逸軍艦が見張つてゐます。陸か海か、其一つに発見せられたら、失禮ながら甲鐵でない以上、其鉢は銃丸で蜂の巢の如く成るばかりです。」

「すると、脱獄は能きんか。」

「残念でありますが、時節の到來するまで脱獄は御斷念なすつたが宜しいと存じます。」

「嗚呼！」

ゴザルコフは失望の聲を擧げた。

「俺には祖國の急を救ひ得んのか。」

黒奴は更に落膽せぬ。

「否、手前には露西亞を救ふ手段があります。」

「何、シイザに？」

「例令海底牢獄を脱出せられずとも、貴下様には此のシイザが申す忠僕が

あります。大使様から軍使に撰ばれたシイザが控へてゐます。手前に英吉利政

府からの秘密書類をお托しになれば、早速御本國へお届け致す事が出来やうと

信じます。」

「うむ………」

「ゴザルコフの目那樣、此の海底牢獄まで參つた手前をお信じ下さい。さう

すれば、早速御本國と英吉利は同盟が出来、勝慢る獨逸を屈服させ得て、
貴下様も易々此獄から救ひ出され、獨立派に使命を果した事に成らうと思ひ
ます。」

黒奴の言には熱誠が溢れてゐる。而も彼は駐獨大使より我への密書を届けて

くれた。此のシイザなら如何なる秘密書類を手渡しても大丈夫であらう。黒

奴には似合はず機敏に且つ主人に忠實なるシイザ！

「黒奴シイザの言は道理である、彼に英政府の密書を托し、本邦政府に届けさ

せたが萬全の策であらう。」

さう思つたゴザルコフは、

「可！シイザ汝に頼まう。」と言つた。

黒奴の眼は暗中に爛々と輝いた。

「では、手前を信じてくだされますか。」

「無論信する！ さあ、秘密書類を渡すから手を出せ。」

ゴザルコフは左腕の繻帯に手を掛けた。

黒奴は鐵柵の隙へ右手を差入れた。左手に懐中電燈を持ち替へて……

暗黒を貫く一道の光明は、獄裡に差入れた黒奴の右手をバツと照した。

——奇怪！

鐵柵に支へられて眩までまくれた黒奴の腕は、印度人種として漆の如く黒か

るべき筈なるに、衣服の間より露はれた腕は、手首の色は反對に白哲人

種の其白だ！

斯くと氣注いたゴザルコフの驚愕は如何ばかりだつたらう。

「呀ッ！」

と叫ぶや否や、彼は渾身の力を双腕に宛めて、鐵柵の隙より差入れたる黒奴

の腕を捻上げた。

意外なる奇襲を啖つたシイザは、

「あッ、痛た、た。」

と覺せず悲鳴を擧げた。

更に驚くべき事實が湧上つた。黒奴の擧げた其の悲鳴は、印度語でもなくば

覺束なき露語にも非らず、純然たる獨逸語なる事だ。

「悪魔！ 汝は敵の間諜だな。」

とゴザルコフは叱咤した。

「え！ 失敗た。」

黒奴はさう思つたが、不用意に叫んだ一言は取消されぬ。斯うなつては今日

までの苦心は水泡に歸した。シイザは黒奴の假面を腔して、獨逸陸軍中尉レツ

クスの本性を暴露した。

「何をするか。放せ！ 其腕を放せ！」

「黙れ！ 悪魔。」

ゴザルコフは益々力を極めてレツクス中尉の腕を捻上げた。

「汝は我輩を見損じたな！ 此のゴザルコフは汝等如きに欺かるゝ愚人ぢやないぞ。黒奴シイザが今日まで我に對する忠實を賞して、この白哲人種に酷似した腕を折つてくれやう。」

「あッ、痛た、た。」

レツクス中尉は苦痛の悲鳴を振絞つた。

「助けて——助けて——助けてくれい。」

「何を泣くか。」

と憤怒の一喝を浴びせかけた。

「汝は獨逸士官でないか、是敷の苦痛に悲鳴を擧げるこは犬にも劣つた奴だ！ 軍人たるものが片腕ぐらゐ折られたさて、女々しく敵に哀を乞ふ奴があるか。」

「う、うむ……」

レツクス中尉は身悶えして、逆に捻上げられた腕を振放さんと試みたが、益々苦痛を増すのみで何等の甲斐も無い。

茲に於て彼は救助を呼んだ。

「誰か来てくれ。」

然し、此獄は海底牢獄の最下底だ。武装衛兵の警戒する場所とは遙かに隔つて居るので、如何に救助を求むると雖も、其の悲鳴は荒れ騒ぐ濤音に奪はれて、衛兵が危難を救ふべく駈着くるには餘りに遠い。

左手の懐中電燈を投捨てたレツクス中尉は、衣兜に納めたる短銃を取出すんとする時、其の右腕はゴザルコフの腕力に依つて捻切られた。

「あッ、残念！」

レツクス中尉は其場に悶絶した。

其の頭を握んで鐵柵際へ引寄せたゴザルコフは、敵の懐中を搔探るこ、此の監房の鍵と共に短銃が手に觸れた。

ゴザルコフは暗中沈黙の中に怖るべき活躍した。其の結果、さしも堅牢を慢る監房より扉外に立出づる事を得た。

彼は素早く假裝黒奴の扮装を奪つて自身に纏つた。而して、レツクス中尉を監房内に投込み、鐵扉堅く錠を鎖した。

監房に投入られたレツクス中尉は、強か石壁に負傷箇所を打當て、それでも辛くも息を吹返した。

「あッ、痛た、た。」
例に依つて悲鳴を擧げながら起上れば、這は開什麼！自分は六尺四方にも足

らぬ牢屋に監禁されてゐるのだ。
「え、！ゴザルコフ汝は我輩を……何うするか」

扉外のゴザルコフは落着拂つて言つた。
「犬の如き獨逸軍人が、我輩の代理として其獄に監禁されたは大なる名譽を心得る。」

「うゝむ、汝はこの海底牢獄を脱出する意だな。」
レツクス中尉は苦痛と憤怒に齒噛みする。

「無論だ！」
ゴザルコフは嚴然として言放つた。

「我にはスラブ魂があるぞ、島上に何百の武裝衛兵ありとも、海に軍艦の警戒するありとも、神に誓つてこの海底牢獄を脱出して見せる。汝は其處から謹んで見物して居れ。」

「ちよッ！残念だ。」
レツクス中尉は地輪踏んで、自己の武運拙きを嘆いた。

「さらば！黒奴シイザ君——いや、勇敢なる獨逸士官よ、予に海底牢獄を脱出する機会を與へくれたる君の好意を謝す。」
斯く一言を残して、ゴザルコフ書記官は悠然と而も大手を振つて立去つた。

海底牢獄の門前には、十餘名の武装衛兵が嚴重に警戒してゐた。

ゴザルコフが其門へ掛ると、

「何者か。」

衛兵が銃先を向けて誰何した。

「親愛なる友よ。」

ゴザルコフは勉めて軽く言つて、

「我輩はレツクス中尉だ。」

「宜しい。」

さう云つて、衛兵は銃先を地に下げた。
ゴザルコフは無事に海底牢獄の門を立出でた。直ぐにも全速力で逃走しやうと思つたが、然うしては敵を疑はしむる道理なので、殊更さ悠々さ歩んで行く。

其時、牢獄内は俄かに騒ぎ出した。

「大變だ！大變だ！敵國の囚人がレツクス中尉を殺して逃げたぞ。」

「今門を通つたのが其奴だ！それ取逃がすな。」

「急いで追跡しろ。」

斯う口々に罵り立て、ゴザルコフの背後から銃弾を雨霰さばかり浴びせ掛けた。

「さては！敵に悟られたか。」

と思へば、ゴザルコフは最う躊躇して居る場合でない。此のリュゲン鳥を踏

出さぬ中に、敵に追跡されては一大事である。早く脱走せねばならじと、彼は渾身の力を以て疾風の如く駈出した。

其の左右には赤熱した銃弾が凄じき唸を立て、飛び来る。

ゴザルコフは唯先へくさ突進した。

「それ！敵は彼處へ行くぞ、引捉へろ！引捉へろ。」

異口同音に叫びながら、衛兵の一團は準備の軍馬に飛乗り、砂塵を捲き立て

、追跡急である。

我は徒歩、敵は馬に鞭つ。一步は一步と双方の距離が接近するばかりだ。

ゴザルコフは九死一生の場合である、今は如何とも是非がない。彼は行手に聲

え立つ巖頭に馳せ昇るや、其處から怒濤渦巻く大海目蒐けて飛入らんとする時

怪しや、蒼空高く天馬の如き飛行船が現れた。

第十二彈 祖國の興廢此一戦に在り

神よ護れ皇帝を

強き權威ある者よ

我等の光輝のために

名譽のために支配せよ

敵をして恐れしむるなく支配せよ

正教 信奉の皇帝よ

神よ護れ皇帝を

國歌は愛國心の結晶である。今や獨逸を敵として正義の戦争を開かん

する露西亞の軍人並びに銃後の國民が、如何に機會ある毎に、祖國の歌を合

唱して、熾烈なる愛國心を表現してゐるであらうか。

神よ護れ皇帝を

強き權威ある者よ

我等の光輝のために

名譽のために支配せよ

——此の悲壯なる國歌が勇ましき軍樂に合せて三度繰返して奏せられるや、リパウ軍港の阜頭に群集した幾十萬の露西亞民族は、光榮ある祖國の爲め、今しも出師せんとするバルチック艦隊に向つて、百雷一時に落つるが如く、

「萬歳！萬歳！」の喚聲を浴びせ掛けた。

絶大なる皇帝の信頼を受け、熱誠なる國民が歡呼の裡に、シリツ提督の統

率せるバルチック艦隊は、勇姿堂々、敵のキール軍港に向つて出發した。

旗艦々上に在つて、國民の熱誠なる歡呼を受けた提督は、其の胸中既

に成算あるが如く、莞爾として傍なる少年ゴルチャキンを顧みつゝ言つた。

「彼れを見ても、我が露西亞民族が、如何に獨逸を敵として戦はんぞ熱望して

居るか、解らう。この信望を擔つた我がバルチック艦隊は、一舉以て敵艦を

粉碎せざばならんぢや！」

「實に愉快です。」

ゴルチャキンは勇躍して、

「僕は未だ十六歳の少年ですけど、祖國の敵父の仇たる獨逸艦隊と戦はな

くなりません、

さ意氣天を衝く、

「然うぢや！其の一言を忘るゝな。」

さシリツ提督は激勵した。

「我等は一死報國の大決心を以て、飽迄も敵艦を粉碎せんぢやならん。それ

が祖國に對する我等の義務ぢや。我等には日本が世界に慢る大和魂と同じく露西亞の實たるスラブ魂を有つて居るて、譬へ生死の境に臨むとも、斷じて國辱さなるが如き卑怯な行爲をしてくれるな。」

「其點は御安心ください——僕はゴザルコフの血を繼いだ露西亞少年です。必らず卑怯な振舞をなし祖國の名譽を毀けるやうな事はしません。」

「うむ、十六歳の少年にさへ其の決心があれば、我等は元より祖國の爲めに決死の覚悟ぢや。我等が死を恐れざれば、如何に頑強なる敵と闘つても勝つ！愉快、愉快、今度の海戦は大勝利である。」

ゴシリツ提督は破顔一笑。

斯る談話の中に、リバウ軍港を跡にしたバルチツク艦隊は、其數三十餘隻、軸艫相啣んで威風凜凜然、バルチツク海の荒浪を蹴破り、敵艦の潜伏せるキール

軍港を目蒐りて猛進した。

併し、敵の軍港まで押寄せぬ先に、其の目的は達せられた。

バルチツク海を横斷する三晝夜、眞先に偵察の任務を帯びて進んだ我が驅逐艦より、

「敵艦見ゆ！」

この無線電信が、シリツ提督の座乗せる旗艦マスコロド號に達したのだ。

此の報告を受取つた提督は、其の統率せる全艦隊に對して、

「戦闘準備！」の令を下した。

「戦闘準備！戦闘準備！」

俗曉たる喇叭の音は海に響き渡つて、其の檣頭高く戦闘旗が翻へつた。

バルチツク艦隊がホルンホルム島近く進んだ時、驅逐艦より第二の無線電信が達した。

「敵艦約二十五隻、リュゲン島方面に現れたり。」

これに依つて、彼我の大艦隊は益々接近した。世界歴史ありて以來、未曾有の大海戦は、今や數時間内に開始せられんとするのだ。

斯かる時、遙かの水平線上に數條の黒煙棚良くが見え出した。これぞ、キール軍港の奥深く潜んでゐた獨逸主力艦隊が、遙ろくバルチック海を踏破し來れる露國艦隊に熱火の饒別をせんが爲めである。

バルチック艦隊を統率するシリツ提督は、これを見るや、平時に於けるより遙か沈着なる態度で、

「祖國の興廢此の一戦に在り、汝等夫れ努力せよ。」

各艦に向け最後の嚴令を下した。

此の豪氣の令は、不屈不撓のスラブ魂を代表したるものである。

「揮へ快腕を。暴慢無禮の獨逸艦隊を撃破粉碎するは今なるぞ。」

旗艦に續く各艦の戦闘員は異口同音に斯う絶叫した。

彼我兩艦隊の距離は刻一刻と相接近した。

突如——敵艦より赤熱の彈丸は飛來した。この一撃ぞ世界的大海戦の幕を切つて落したものである。

轟々たる砲聲は地軸を砕くかと思はれ、濛々たる白煙は蒼空を蔽ふて天日光なく、茲にバルチック海上は一大修羅場と化した。

獨逸と云ひ露西亞と云ふも、互に祖國の興廢を賭したる「此一戦」である。

彼我の戦艦旋風の如く混亂して、彈丸雨注、硝煙天に漲き、喊聲海を震はして勝敗何時に到つて決すべきかを知らなかつた。

斯く戦闘が混戦状態に陥れば、勝敗は一に其の艦隊を統率する提督の手腕にあるのだ。敵の獨逸艦隊は暫く言はず、バルチック艦隊を統率せるは、往年の日本海々戦に於て、多大の實戦經驗を有せる世界の名提督シリツ提

督であるから、其の旗艦々上に死屍は積んで山を成し鮮血は迸つて瀧を爲すことも更に怖るゝ所無く、挺身勇邁、長剣を揮つて、彈丸雨注の間を馳騁し乍ら、

「祖國の興廢は「此一戦」に在り、奮へ勇士よ、奮へ勇士よ。」

さ指揮するのである。

開戦前よりシリツ提督に扈從せる少年ゴルチャキンは、機關砲手の一人が戦死するを見るや、提督の命を受けて、其所へ飛んで行き、直ちに其の補欠に立つた。

最初は兩艦隊とも、相當の距離を計つて砲火を交へて居たが、混戦となるや次第々々に接近して、今は彼我の舷々相摩するばかりである。

斯くなると、最も絶大の威力を發揮するは機關砲だ。

我が旗艦を目覚めて、左右より挾撃する敵艦に向つて、ゴルチャキン少年が

砲手となつて撃出す機關砲は、殆ど一發の空彈無く、敵艦上は見る間に死骸の山を築いた。而も其の一弾は火薬庫に命中して、大火災を起したが、旋て蕚然たる大爆發と共に、其の長鯨に似たる巨體を怒濤の裡に没し去つた。其時までは、シリツ提督如何に勇たりとも、敵艦を打破するを得ず、祖國の興廢を「此一戦」に擔へる彼我の艦隊は、互角の猛勢を以て惡戦苦闘を續けてゐたが、ゴルチャキン少年の手柄に依つて、敵艦一隻が撃沈せられたが運の盡きで、俄かに總崩れとなつて退去を始めた。

「進撃！進撃！此期を逸する勿れ。」

此の機會を待つてゐたシリツ提督が激しき下知に、全艦隊は直ちに總攻撃に移つた。

逃ぐる艦隊と逐ふ艦隊である。斯くなつては既に勝敗は決したも同然だ。敵艦九隻は撃沈され、十二隻は白旗を掲げて降伏した。

撃洩らされた敵艦四隻は、最早戦闘力無きまでに大損害を被り、キール軍港を指して遁走した。

此時、バルチック艦隊なる旗艦々上より、ツエツペリノ式飛行船は、砲煙濛々として未だ散ぜざる空高く飛揚した。

恰も天馬の如く蒼空を馳驅する壯快なる飛行船は、直ちにキール軍港指して遁走する四隻の敵艦上に達し、爆裂弾投下を爲すや、敵艦は焔々たる猛火に裏まれて、無惨、前にバルチック海の藻屑となつた僚艦と其の運命を均うしたのである。

是れを天上より痛快なりと眺めた飛行船は、直ちに旗艦に引返すかと思ひの外、尙ほも全速力を出して前方へ突進するのだ。

何處へ行く？ 曰くリュゲン島へ！ リュゲン島へ！

第十三彈 飛行船上親子の邂逅

海底牢獄を脱出したゴザルコフ書記官が、小銃を連發する衛兵に追撃され、今や巖頭より海中に飛入らんさせる時、蒼空遙かに認められた天馬は、即ち此のツエツペリノ式飛行船なのであつた。

その飛行船こそ、ゴザルコフが見覚えある本國海軍所屬の其れなんだ。

飛行船は早くも海底牢獄の眞上に飛び來つたと思ふ程もなく、船上より何物が投下せしと見えたが、自然たる大爆聲と共に、海底牢獄は立地に粉砕せられた。而して、巖頭のゴザルコフ日蒐けて一筋の麻繩は投げおろされた。

ゴザルコフは勇氣を揮つて麻繩の一端を掴んだ。

飛行船は空中高く飛揚しつゝ、靜かに麻繩を繰上げ出した。

天祐——天祐——あゝ天祐は眞にかゝる奇蹟を指して言ふのだらう。

漸う飛行船上に引揚げられたゴザルコフは、意外にも此の天空に於て、我兒

のゴルチャキンに邂逅したのであつた。

「父様よく御無事でした！」

「おゝゴルチャキン！」

親子は堅く握手した。其の暮々握り緊めた愛兒の手首には、感謝に満ちた父

の熱涙が滂沱として降りかゝつた。

是に據つてゴザルコフ書記官は、祖國の安危に關する重大なる我が使命を完

ふする事が出来たのである。

* * * * *

此一戰終

左はあれ、カイゼルが多年心血を濺ぎて擴張に擴張を行ひ、世界の

精銳と慢つた獨逸海軍——カイゼルをして英佛露の三國同盟何かあらんやと

鑑袖一觸の意氣を示せし其の大艦隊が、敵のバルチック艦隊の爲め「此

一戰」に依つて、見苦しく全滅せし敗報を耳にせる際、彼カイゼルの感慨果し

て如何？

此一戰を動機となし、英佛露三國の同盟軍に依つて、獨逸の國名は永遠に

世界地圖上より抹殺さるべきか。

これより全歐洲の天地は益々大渦亂の修羅場と化し去るのである。

武俠小說
春石、紫光著

- 海底迷宮
- 決死魔團
- 海上血戰
- 快傑少年
- 深山魔境

各册裝表極色彩頗美
定價金五十錢送料二錢

大正三年十月三日印刷

大正三年十月八日發行

武俠叢書
第一編
著作權所有

<input type="checkbox"/> 此一戰	<input type="checkbox"/> 定價金拾錢 郵稅金貳錢
著者 北島英一	東京市日本橋區若松町四番地
發行者 湯淺彙策	東京市神田區松住町五番地
印刷者 菅井十一郎	東京市神田區松住町五番地
印刷所 碓文社	東京市日本橋區若松町四番地
發行所 春江堂書店	東京市日本橋區若松町四番地 電話(四八六二番) 振替東京(一八〇六社)

274
1037

終

